ウェルビーイングを考える～みんなで踊りを：自然から“いのち”へ～

第12回環境シンポジウム「ウェルビーイングを考える～みんなで踊りを：自然から“いのち”へ～」（公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団主催）が11月19日、大阪市内で開催された。より多くの「いのち」との共感や共生をテーマに、アートや行政といった多様な視点から活発な提言が行われた。同シンポジウムの模様は同財団YouTubeチャンネルでアーカイブ配信している。

開会のあいさつ

公益財団法人　りそなアジア・オセアニア財団　理事長
株式会社長谷エコーポレーション副社長執行役員　岡橋　達哉氏

りそなアジア・オセアニア財団は自然環境を守る活動に対して1件あたり年間約１００万円の支援を行っています。これまで13年間で46件の事業に支援を行い、アジア・オセアニアの15カ国で成果を上げてきました。

現在、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を実質的にゼロにすることを目指すカーボンニュートラルが世の中の合言葉になり、注目が集まっています。環境問題の解決には莫大なコストがかかると考えてしまいがちですが、われわれは、小さな草の根の活動こそが大切であり、人々が環境問題を自分事として考え、活動を広げていくことに大きな価値があると考えています。いよいよ来年4月13日に、大阪・関西万博が開幕します。今回のシンポジウムは幸福な状態を意味するウェルビーイングを中心に、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」に合わせて「いのち」にもフォーカスしています。活発な意見交換を通じて、多くの方々に環境問題を解決する上での新たな気付きを提供したいと考えています。

基調講演①　「アートが生みだす共感とエネルギーの場」

芸術を通じて地球が抱える様々な課題を考える

すべてのものとダンスを踊って

金沢21世紀美術館　館長
長谷川　祐子氏

私が２０２１（令和3）年4月から館長を務めている金沢21世紀美術館は、石川県金沢市に２００４（平成16）年にオープンした現代美術をテーマにした市立美術館です。地上2階地下2階建ての建物は総ガラス張りで「まちに開かれた公園のような美術館」をコンセプトにしています。全国から注目を集め、年間来場者は２５０万人を数えます。

なぜ芸術が必要なのかということを考えてください。生活が便利になり情報技術も発達している状況で、なぜ断絶が生じているのか。今必要なのは、差異を暴き立てることよりも共通している部分を見つけることだと思います。

人類が二足歩行を始めてから言語を発明するまでの数万年間、どのように意思疎通し助け合っていたのでしょう。ある意味、弱い生き物である人類がなぜ存続できたのか。それは、身体の動きやボイスパフォーマンスによって互いのことを知り、共生していたからでしょう。まるで踊るように、目を合わせたり、手を合わせたり、リズムを共有することで理解し合っていたのだと思います。

人間は優れた芸術作品を残してきました。しかし、なぜ芸術が感動を生むのか。実は誰も分析できていません。芸術の歴史は、人間の感情、感性、価値観の積み重ねです。他者への共感と併せて、芸術への関心を今一度呼び起こしてもらいたいと願っています。これから先、ＡＩ（人工知能）に支配されないように五感を通じた感覚学習の大切さを知っていただきたいと思っています。

金沢21世紀美術館では、２０２４（令和6）年11月2日から２０２５（令和7）年3月16日にかけて特別展「すべてのものとダンスを踊って―共感のエコロジー」を開催しています。地球が抱えるさまざまな課題を人間や動物にいたるすべての生き物とダンスをするように乗り越えたいという思いから企画しました。

会場では〝自然〟という概念を持たずすべてが〝人間〟とする世界観を持つ、南米アマゾン、北西海岸先住民、イヌイットなどの先住民の作品が集い、異種間のものたちがダンスを踊るように、生命と生き延びるための知恵を分かち合っています。

段ボールを彫刻した水平に展開する森のようなオブジェ、ドイツから日本にシベリア鉄道を使って3週間かけて輸送する際に、列車の動きや揺れを記録する装置によって紙の上に描かれた、いわば地球が描いたといえるドローイング、植物神経生物学の専門家による植物の複雑な生を写し取ったモノタイプ、ビーバーがかじり残した美しいフォルムの木材、金沢市内の神明宮に生える樹齢１０００年の大ケヤキの生体信号を展示室内のモニターで映像として表現するインスタレーション、昆虫学者の協力を得て制作したオーストラリアのジャンピングスパイダーの踊るような求愛行動の映像といった作品を展示しています。

また、能登半島地震で被災し、むきだしの傷を見せている当館の天井に治癒と癒やしを与える域を実現した15世紀のイタリア絵画「出産の聖母」の拡大した複製画とデジタルで作ったデータを現実にダウンロードした怪物のような彫刻、能登半島地震後に金沢市内に二次避難をしてきた輪島塗の職人たちによる割れた九谷焼の陶器を補修したり、割れた形を生かして新しい価値を加えた作品も展示しています。

金沢の地で、自然や目に見えない存在との交換作業を通じて、自らもエコロジーの一端にいることを確信していただけたら幸いです。

事業報告　「レッサーパンダに最適な森を求めて　～地域住民参加型保全活動の可能性～」

ＩｏＴでレッサーパンダ生息に適した環境を可視化

多様な動物種が暮らす森をネパールで育む

大牟田市動物園　企画広報・教育担当
冨澤　奏子氏

大牟田市動物園は、福岡県大牟田市が所有し、民間企業が指定管理者として運営を行っています。「動物福祉を伝える動物園」というコンセプトの下、動物たちの生活の質の向上のためにさまざまな取り組みを行っています。その中で私は動物園の企画広報、教育を担当しています。動物園の多種多様な取り組みや成果を国内外の皆さんに広く知っていただけるように動画などのコンテンツは、分かりやすく楽しいものを作るよう心掛けています。

本日はりそな環境助成による支援をいただいて２０２３（令和5）年から3年間の計画で行っているプロジェクトについて報告をさせていただきます。プロジェクトのタイトルは「ネパールにおけるＩｏＴセンサシステムを活用したレッサーパンダ生息地の環境保全、ならびに環境教育の推進」です。このプロジェクトは、ネパールでレッサーパンダの保全活動に取り組んでいるレッドパンダネットワーク（ＲＰＮ）、崇城大学、九州大学と共同で進めています。

レッサーパンダは国際自然保護連合のレッドリストに登録されている絶滅危惧種です。ネパール、中国、インドなどの複数の国々にまたがって生息しており、その生態には、人間の経済活動が大きな影響を与えています。ＲＰＮは地域住民参加型の保全活動を実施し、研究とモニタリング、生息地となる森の復元や管理、教育と情報発信など、さまざまな取り組みを進めています。

森が復元されることで、レッサーパンダが戻ってくることが、すでに明らかになっています。今回のプロジェクトでは、レッサーパンダの生息地保全のため、２０００本以上の植林を進めると共に、植林の効果を科学的データで可視化する取り組みを進めています。

ＲＰＮが既に設置している40台のカメラに加え、センサー付きのカメラ5台をレッサーパンダが生息している天然林、これから植林を進めていく地域、植林した結果、レッサーパンダが戻ってきた地域などに設置しました。

センサーで、植林する場所によって異なる温度、湿度、日照度などを測定しています。データを比較することで、レッサーパンダが好む森の性質を可視化することができます。レッサーパンダは、この地域の象徴種であり、レッサーパンダが好む森をつくることは、他のさまざまな動物種が好む森をつくることにもつながると考えています。カメラに写った動物の画像を基に動物の種類や出現頻度をＡＩで自動的に判別する取り組みも行っています。

今年6月には、ネパールで住民の方と一緒に植林活動を行ったほか、レッサーパンダの保全活動に取り組んでいる人たち40人以上にインタビュー調査を行いました。現在、これまでに得られた知見、インタビューの内容、センサーで得られたデータを基に教育活動のためのワークブックをネパール語、英語、日本語で作成しています。子供から大人まで幅広い方々を対象とし、教育活動を展開したいと思っています。日本とネパールの学校をインターネットでつないだ国際教育にも挑戦したいと考えています。